

め腫瘍の位置同定にあまり有効ではなく、エコーが有効であった。摘出は、まず腫瘍皮膜を切開して血腫を吸引、内減圧した後、腫瘍周囲と脳の間を剥離を進めた。本腫瘍は時に脳内に入り込んでおり、小さくともこれを残すと再出血の危険があるので、腫瘍と脳の間を常に視野下におき、特に feeder の入っている部分の剥離焼灼切断の際には注意が必要である。また基本的に、腫瘍周囲の glial scar の層は脳側に残すことが、eloquent area の手術に重要と思われた。

【術後】麻痺知覚異常、は全く出現せず。MR 上全摘を確認した。

12 顔運動野焦点の切除術

亀山 茂樹・大石 誠・増田 浩
本間 順平

国立療養所西新潟中央病院てんかんセンター
脳神経外科

【目的】運動野は eloquent area として脳神経外科医が手出しの出来ない神聖な場所と考えられてきた。しかし、てんかん発作はまれに運動野から起始する。手術法として、multiple subpial resection (MST) があるが、我々は、新皮質てんかんの手術戦略として、裁断的皮質切除術が最も優れていると考えて実践してきた。MST は 1 例のみである。これまでの 63 例の新皮質てんかん手術から学んだ経験を基に研究を進め、顔運動野の切除が可能であるという結論に達したので、3 例の自験例を報告した。

【症例】1 例目は、10 歳男児。右前頭葉弁蓋部に萎縮性皮質形成異常を認め、発作頻度の増加と知的退行を理由に切除術を行った。焦点は顔運動野を含む中心・頭頂葉にあったが、皮質マッピングで顔の反応が認められなかったため広範な皮質切除術を行った。術後顔の麻痺は生じなかった。2 例目は 37 歳男性。顔運動野起始の発作があり、切除を行った。術中に motor evoked potential (MEP) マッピングを行い、顔運動野と手の運動野を鑑別して顔運動野のみを切除した。顔の麻痺が一過性(約 1 週間)に生じた。3 例目は 25 歳男

性、結節性硬化症で多発結節を認め、焦点同定は脳磁図が導入されてから可能となった。皮質結節後方の顔運動野が焦点であり、術中 MEP マッピングにより顔と手の運動野を鑑別し焦点と皮質結節を切除した。術後一週間の顔の麻痺を認めた。3 例とも発作は消失した。非優位半球の顔運動野切除である。手の麻痺は出現しなかった。

【考察と結論】文献的渉猟で、顔運動野焦点切除の論文が 2 編見つかった。自験例と同様に、顔運動野焦点は切除可能であり、顔面の麻痺は約 2 週間の一過性であった。優位半球でも失語症状は一過性であったという。現在 MEP マッピングで顔と手の運動野を厳密に分離することが可能になっており、顔運動野焦点は裁断的に皮質切除すべきであると結論できる。

13 Sinus pericranii の手術における問題点と手術法の選択 — The problems and selections of the operation of sinus pericranii —

原田 篤邦・江塚 勇・柿沼 健一
横田 晃*

新潟労災病院脳神経外科
産業医科大学脳神経外科*

【目的】Sinus Pericranii は本邦では広く知られた疾患であるが 1962 年以来数十例の報告のみで、手術の実際を経験することは極めて少なく、手術ビデオの供覧は意義があると考えられる。手術は平易なことが多いが、種々の問題点を孕む。その手技は頭蓋骨膜洞への血流遮断に尽きるが、開頭術は不要との報告も多い。今回手術ビデオを基に検討、文献的考察を加えた。

【症例・現病歴】3 歳男児(ビデオ有)及び 57 歳男性でいずれも臥位で腫脹し立位で陥凹する腫瘤を有し、57 歳例では腫瘤部皮膚は菲薄化、潰瘍形成を認め、易出血性だった。

【手術所見】腫瘤はいずれも多数の微小血管から血流を受け、骨孔からの出血は骨蠟で止血した。しかし、57 歳例では再発したため、開頭術を行い、治癒せしめた。

【考察】この疾患は双方向性の血流を持つ拡大

した血管腔であり、dural sinusと直接交通を持つものとdiploic veinなどを介してsinusと交通を持つものがある。新鮮例ではその血流遮断は容易なことが多いが、発症から数十年経過例ではbone wax充填では、止血が不十分となる場合が多い。その場合は開頭術の選択が望ましいが、sinusと直接交通例の場合、大量出血の危険性がある。sinusと間接交通例の場合、新鮮例では止血は容易なことが多いが、陳旧症例では、一旦止血を見ても再発してくる場合があり、開頭術の選択が望ましいと考えられた。

Key words: sinus pericranii, surgical technique, recurrence

14 Paraclinoid aneurysm of ICAの手術

本道 洋昭・河野 充夫・中川 忠
川崎 浩一・小倉 憲一

富山県立中央病院 脳神経外科

最近経験した paraclinoid aneurysm of ICAの2手術例を報告する。

〔症例1〕66歳女性で、55歳HCV(+), 60歳DM, 66歳高血圧で治療を受けている。2001年9月13日AM11:00頃、立山で作業中突如後頭部痛が出現。嘔吐あり。意識消失なし。ヘリコプターにて来院。頭部CTでSAHの診断。H&K grade 3, 右外転神経麻痺を認めた。同日アンギオを行い、両側内頸動脈瘤が見つかった。大きさとblebを有していることより左側が破裂と考え、頸部で内頸動脈を確保した後、左開頭で視神経管を約4mmドリリングしてclippingを施行した。右側の動脈瘤は観察できず。術後経過は良好で、10月13日退院した。

〔症例2〕58歳女性、40歳の時子宮筋腫摘出術を受けている。2002年9月6日頭重感にて他院脳神経外科を受診。MRAにて左内頸動脈瘤を疑われ、9月13日から21日まで検査入院。9月25日検査結果を持参して当科初診。神経学的に異常なし。11月5日手術目的に入院。11月7日、右からのcontralateral approachでドリルを使用することなくclippingを行った。術後経過は良好で、11

月26日退院した。

Paraclinoid aneurysm of ICAの治療は術前の画像所見を充分検討して、安全かつ確実により侵襲の少ない方法を選択すべきと考える。未破裂で内側向きの場合、視交叉がprefixed typeでなければ、contralateral approachは常に考慮しておくべき方法である。

15 当院における脳動静脈奇形に対するガンマナイフ治療

西野 和彦・佐藤 光弥・森井 研
矢島 直樹

北日本脳神経外科病院 脳神経外科

1997年からの約5年間に当院でガンマナイフ治療を施行した脳動静脈奇形(AVM)98例の治療成績を検討した。患者の平均年齢は38.7歳(7-75歳)。

初発症状は出血58例、てんかん16例、虚血症状3例、無症候あるいは頭痛18例、その他が6例。Nidusの大きさは平均3.2ml(0.1-18ml)。照射した最大線量の平均は39.7Gy(26-50Gy)、辺縁線量は平均19.8Gy(13-25Gy)であった。

治療後2年以上経過し追跡調査が可能であったものは59例。全症例における閉塞率は66.1%。Nidusの容量が4ml以下のAVMでは閉塞率は68.5%。4-10mlは65.0%。10ml以上のものでは50.0%。Nidusが4ml以下の群ではAVFともいべきFistulousな形態を示すものが7例含まれており、これらの閉塞率は極めて低かった(28.6%)。Fistulousなものを除くと4ml以下のAVMの閉塞率は78.5%であった。照射後の出血は5例に見られ、1年以内の出血率は3.6%、2年目における出血率は4.7%。3年目以降の出血はない。出血例のNidusの容量は平均8.8ml(4.7-14ml)と大きく、うち4例はHigh flowでDrainerにVarixを有していた。4ml以下のものでは出血を認めなかった。放射線障害によると思われる神経症状が出現したものが1例、治療を要する頭痛を3例に認めた。

【結論】4ml以下のものは閉塞率が高く、照射後